



現代社会科学と方法の問題(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金谷, 義弘, Kanaya, Yoshihiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5820

現代社会科学と方法の問題(2)

—「限界と制限」の弁証法と事物の発展—

金谷義弘

**Die Moderne Sozialwissenschaften und das Problem der Methode (2)
Die Diarektik von „Grenze und Schranke“ und die Entwicklung der Objekte**

Yoshihiro KANAYA

目次

- 問題の所在 — 欧州経済・通貨統合という活きた事例と事物の発展を把握する方法 —
- 第一節 欧州経済通貨統合を資本主義の内的な諸限界を制限として突破する過程とする方法論
1. リーマンショックとの対比でみた欧州経済危機
— 資本主義的発展の新たな基盤を建設する過程と経済危機 —
 2. 資本主義の生命性と限界・制限の弁証法
 3. 個別科学研究によってもっと深化させる必要がある「限界・制限の弁証法」
 4. 事物の持つ限界には、超えられない限界と超えられる限界とがある
 5. 「限界と制限の弁証法」と欧州経済統合研究のパーспекティブ
- 第二節 ヘーゲルにおける当為・限界・制限の弁証法とその批判的な継承
1. ヘーゲル「有限性(c)有限性 β 制限と当為」の考察の概要とその問題点
 2. マルクスにおける「限界」と「制限」
 3. 「限界と制限の弁証法」とその現代的な可能性
- 第三節 生物の発生過程と限界・制限 — 本田久夫『形の生物学』を事例に —
1. 身体の表面は「上皮シート」でおおわれている
 2. 本多氏の問題設定 — 袋の構造と形の生物学 —
 3. 胚胞という袋の形成から、フラクタル的なこみ入った袋構造への発展へ
 4. 形の生物学と限界・制限という方法論
- 結 論 分析的方法を前提とした限界と制限の弁証法とその可能性

問題の所在 — 欧州経済・通貨統合を活きた事例に事物の発展を把握する方法を考える —

欧州経済の新展開に関する新しい著作が刊行されました。朝日吉太郎編『欧州グローバル化の新ステージ』（文理閣、2015年）です。本書の特徴は、大きく以下の四点に要約できると考えられます。

第一に、2009年10月ギリシアのパパンドレウ政権が、前政権の巨額の国家債務を隠蔽していたことを暴露したことをきっかけに発生した、欧州経済全体を巻き込んだ一連の経済危機とその政治的対立の高まりを、一面的に経済的政治的危機として把握する立場、すなわち「危機論」¹⁾という図式で捉えとらえる通説的な考え方に対して、実証的研究とともに、それではダメであって、その限界を明らかにすることを明確に自らの課題に課したことです。第二に、こうした危機論の見解に対して「Target 2」²⁾が如何にして現在のユーロシステムと統合欧州経済を支えているかを最新の調査を踏まえて明らかにしたことです。第三に、通貨・金融、財政、協同組合、ドイツやフランスの雇用・移民・外国人労働者、スウェーデン・モデル、エネルギーシフトと環境規制、ムスリム移民、トルコのEU加盟など、日独研究者の共同研究によって多面的に欧州の社会経済の現状を明らかにしたことです。そして第四に、各章の個別研究を貫く方法論を総括して、序章で、危機論の方法論の限界と対比しつつ、その方法について包括的に論じた点、すなわち方法論を強く意識した研究という特徴を持つことです。

本稿は、この第四の特徴と関わって、特に序章で編者の朝日吉太郎が強調する「限界と制限」という論理のカテゴリー³⁾が、論理学内部の議論を超えて、現代資本主義を分析するための有効な論理のカテゴリーとして、更には、自然科学を含む経験科学のツールとしての有効であることを明らかにしたいと思います。

第一節 欧州経済通貨統合を資本主義の内的な諸限界を制限として突破する過程とする方法論

上述の危機論との関係で、この研究の最も重要な基本認識を、私の観点から簡潔に述べればこうなります。すなわち、2008年のリーマンショックもまた危機だと言われ、その同一性において論じられますが、私は、両者を簡単に「危機」の同一性で理解してはならないと思います。リーマンショックと今回の欧州通貨危機とは大きく異なる点があるのです。

1. リーマンショックとの対比でみた欧州経済危機

— 資本主義的発展の基盤を建設する過程と経済危機 —

すなわち、リーマンショックは、一方で、アメリカ国内で形成された住宅バブルがあり、他方では、金融工学を駆使した金融派生商品の開発と発行が行われ、後者が、アメリカ国内の不動産バブルに世界各国から資金を動員する手段として機能することで、バブル経済の極端な拡張を支え、バブル経済と国際的な資金動員とは螺旋的に拡張していきました。そして、前者の不動産バブルの崩壊が、後者の金融派生商品などの資金供給経路を通じて、このバブルの収縮と混乱を、アメリカから欧州など世界経済に波及させたというのが事の本質です。したがって、リーマンショックという事例では、アメリカ経済の当時の好調の上に形成される「バブル経済の形成と崩壊」という問題が主たる研究対象となるのです。

これに対して、欧州経済統合の過程で発生した経済危機では、リーマンショックと同一の危

機という側面をあわせ持ちながらも、他方では、ヒト・モノ・カネが従来の国境を越えて運動するという欧州統一市場の建設という、欧州資本主義のなお未完結の歴史的発展過程が存在すると言わねばなりません。それは、1999年のユーロ決済開始や2002年のユーロ現金通貨の流通で完了した訳ではなく、矛盾と多様な混乱を伴いながら、今後なお金融制度・財政制度の統合へ進まざるを得ないと見られます。

しかし、欧州資本主義の発展性、朝日氏の編著書の用語で言いかえると「資本の生命性」⁴⁾ということをしっかり踏まえることは、けして欧州の経済団体の本丸の側に立って危機を否認するための放言などではないのです。

この欧州資本主義の発展過程の途上で、各国の労働運動や多様な市民運動が第二次世界大戦後に勝ち取った成果は、各国の金融・財政制度と政策の細部に具現されており、これが統合に伴う平準化の中で失われることとなります。そして、統合の過程で発生した通貨危機や財政緊縮政策の強要との戦いや、域内の不均等発展の多様な弊害との戦いが不可避だと言えますが、同時に、各国の経済的制度的な枠組みに制約されていた労働者階級の戦いは、統合欧州のレベルでの戦いに展開され開放され、高度化されねばなりません。眼前の通貨危機や緊縮政策との戦いも、それ自体意義があるから戦えば良いというのではなく、こうした欧州資本主義の歴史的発展に照応した方向へ糾合させる戦略を持たねばならないのです。これが朝日氏の主張の根幹にある現状認識だと言えます。氏は次のように言います。

「〔ギリシアなどの〕個別の危機はむしろヨーロッパ統一に向けた過渡的な過程における問題の噴出として限定的な現象であり、その問題に苦悩する必要性に迫られている個別の主体にとってまさしく危機をもたらすものであっても（そしてまた、このレベルの危機は実際に山積しているのであるが）、〔この危機は〕ヨーロッパ統一の危機でも、欧州資本主義経済全体の危機でもないのである。／つまり、それぞれの階層における法則が生み出す危機や、個別の副次的な主体にとっての危機が生まれつつも、主たる主体である欧州資本主義は、それをも統合の手段として利用して、したたかに新たな有機的な統合に向けて発展しているのである。」⁵⁾

この点で朝日氏が現代欧州経済研究の課題を次のように述べることに、私は全く賛成です。「本書の課題は、2002年の共通通貨ユーロの導入以降今日に至るヨーロッパの経済・社会情勢を、資本の国際化と蓄積条件の新たなステージの形成過程として位置づけ、その過渡的・発展的性格と特徴を明らかにすることにある。」⁶⁾

2. 資本主義の生命性と限界・制限の弁証法

ここには、次のような方法的要請を持つ問題の解決が必要であることが指摘されています。すなわち私たちは、一方で、欧州資本主義の経済統合、通貨統合という資本主義の発展過程とそこから発生する諸問題を取り扱わねばなりません。その中で、他方で、危機だ、危機だと指摘することで、欧州資本主義を新たなステージのグローバル資本主義に改造せんとする「資本の生命性」を看過してはなりません。すなわち、「資本の生命性」に面と向かって科学的に対峙し、現代に必要な社会改革のプログラムを提示するという課題を置き去りにしてしまう危機論的な研究と意識的に決別せねばならないということです。

このような見地から氏が指摘するのは、資本の生命性を明らかにする方法として、ヘーゲルによって論理学研究の中で提起され、マルクス、そして見田石介によって次第にその合理的核心が明らかにされてきた「限界・制限の弁証法」に学ぶことです。すなわち、現代ヨーロッパ

経済は、多様な「限界」にぶつかって「危機」に陥っているように見える。しかし、朝日氏は限界を意識し、これを突破する運動もまた存在するし、これこそ研究すべきであると主張しています。そして、多様な調査や研究によっても、欧州経済界中枢には、むしろ危機感がなく、調査団はこれに驚いたと言います。

「しかし、それらは危機として十分には顕在化せず、現地の当事者たちとの面談ではむしろその危機感の無さに驚くといったことが続いた。これはなぜかを考え、〔朝日氏等の共同研究の〕前著では欠如していた、ヨーロッパのグローバル化の進展によって作りだされた新しいステージとその中でドイツ資本主義の占める位置の分析をおこなうということがこの疑問の解決の手段であることに気づくまでに、時間を必要とした。そして、ユーロ圏の経済発展とそれに基づく社会秩序は、その過程に紆余曲折はあるものの、危機論に示されているような諸限界を〔〕諸制限として次々と突破し、着実にさらなるヨーロッパの統合に向けて前進している、というのが調査を通じて私達が得た結論であった。」⁷⁾

ヨーロッパ経済の現状を見る時、朝日氏が主張するように、多数の矛盾が噴出しているとはいえ、ヨーロッパ経済統合は、むしろそうした噴出する矛盾を逆手に取って進展する状況がある。これを科学的に明らかにする必要があるが、実証的分析と同時に、それを方法的に如何に総合・総括するかということが課題となることは、全く正しい指摘であると思います。

3. 個別科学研究によってもっと検証し深化させる必要がある「限界・制限の弁証法」

しかし、これらを受けた朝日氏の方法に関する議論には、未整理の諸論点とそれに伴う混乱が見られ、この点を克服する必要があるように思われます。未整理と私が言う諸点を、合理的主張も含めて整理すると次のようになります。(1)危機論が、上述のように事態の発展性を明らかにしないで危機の指摘で終わるという意味で「主観的イデオロギー」であり、「資本の生命性」を具体的に明らかにすることが重要であること⁸⁾、(2)資本主義の自由競争の基礎とその上に成り立つ独占資本主義からなる「法則の階層性」の主張⁹⁾、(3)法則の階層性と階層的法則に関する考察¹⁰⁾、また、(4)「成の弁証法」をテコにした危機論批判¹¹⁾などです。この4つ目の批判は、その適否は別にして、危機論の立場に立つ方々から見ると、自分たちの主張の外部から「成の弁証法」という型紙を押し当てて、その誤謬の同一性を指摘するという手法になっているように見えます。また、(5)欧州資本主義の発展性を解明するために言及されている「限界と制限の弁証法」については、欧州資本主義を好適な具体例にして十分にその積極性が語られていないように思われます。

そこで、ここでは、氏がもっとその分析に立ち入るべきであったと考えられる「限界と制限の弁証法」について、氏の考察から一歩進んで検討し、これらの議論へ立ち戻りたいと考えます。というのも、上掲の引用文にある「危機論に示されているような諸限界を諸制限として次々と突破」する過程を今まで以上にリアルに研究できるのであれば、それは科学にとって出たとこ勝負で研究するのではなく、科学的認識が事態を生き活きと分析・把握することに科学方法論の領域から寄与できると思われます。そこで、私は、(1)社会科学の認識にとって、事物の持つ「限界」の意味を考え、また、(2)これを「制限」として「突破」することの意味をもっと深く考えたいと思うし、そしてこの論点を、(3)ヘーゲル論理学の批判的継承によって極めて深く明らかにした見田石介の到達点とその限界を明らかにし、(4)朝日氏らの共同研究に学び、さらに一歩前進する観点を提示したいと願うからです。

4. 事物の持つ限界には、超えられない限界と超えられる限界とがある

まず、事物は、それが欧州資本主義だとか、万年筆だとか具体的な実在として、そのものがそのものであるための一定の質 (Qualität) を持ちます。もし、この質が否定されてしまうと、事物はもはや欧州資本主義だとか、万年筆であることをやめてしまいます¹²⁾。したがって、変化に晒されながらも、事物が欧州資本主義であるとか、万年筆であるという自らの限界 (Grenze) の中にとどまるからこそ、それは欧州資本主義とか万年筆であるとかであり続けることができるのです。もちろん、事物は一面的に規定されてはならず、それは肯定的にも、否定的にも、十分に分析されねばなりません。その上で、私たちは、事物がすべて自らの限界の中にあり、その事物の変化がこの限界を乗り越えてしまうと、その事物はそれではなくなってしまうことを理解する必要があります。この意味で、私たち経験科学者は、皆、この有限性の中で事物を見ており、またこの限界を乗り越える事態を研究することで、他のものへの事物の変容を研究しているのです。

ヘーゲルは、こうした事物の質、限界というものを、一方である程度、適切に把握し、彼の「有論」の中で先駆的に論じているのです。しかし、ヘーゲルは、論理学研究の第一部「有論」¹³⁾の中で、この「有限性 (Endlichkeit)」について論じたら、次いで、これに対して「無限性 (Unendlichkeit)」を対置します。ここにはヘーゲルの観念論者としての弱点が良く現れています。すなわち、彼は有限なものを低いものと見て、高い無限なものを見出して、すなわち神に通じるものに到達して各章の記述を完結しようとしています。しかし、私たちが見るべきことは、そうした観念論的な弱点だけではありません。ヘーゲルは、この有限性の内部では、非常に事物をよく観察しており、現代の社会科学に役立つ事物の運動原理、それに照応する論理的諸カテゴリーを発見・記述しているのです。

そこで、欧州経済統合というものを、その歴史的発展過程の中においてみましょう。そこで問題とすべきは、朝日氏の言う「限界を制限として突破する」という方法的見地です。では、通貨統合などを事例に、欧州資本主義は、その経済統合によってどんな限界・制限を突破したのでしょうか。

まず、事物はこれに固有の質=限界を持ち、これを超えてしまうと、そのものではなくなってしまう。それでは欧州資本主義の歩みを私達はどうみているのでしょうか。すなわち、欧州資本主義の統合過程は、(1)自らの質=限界を超えて、ある他者になる移行なののでしょうか。それとも、(2)自らの質=限界を超えないで運動する自己同一性を保った移行なののでしょうか。おそらく答えは立場を越えて鮮明です。欧州統合の過程で、その担い手たちは、党派の違いを超えて、誰も資本主義を乗り越えようと欲した人はおらず、欧州統合の過程は資本主義の自己同一性を維持した移行と考えて間違いありませんし、第二次世界大戦以後も、一貫して新自由主義的勢力に牽引されてきた行程と言えるでしょう¹⁴⁾。そして、欧州各国の国家主権を抑圧し、破壊することはあっても、統合された欧州経済に、金融・財政制度を通じた国家による経済過程の総括を廃棄することはないでしょう。そこで、多様な事実を念頭に置くことで、この立脚点から、以下の一連の判断を分析して提出することができます。

すなわち、経済統合を進める欧州資本主義を含めて、資本主義的生産様式は、

- (a) 資本主義国家とその国家の経済的機能によって経済過程を法的・政治的に総括することが必要不可欠です。更にこれを具体化すれば、次のように言えます。
- (b) 国家による通貨・金融制度とそれによって経済過程を総括することが必要不可欠であり、

(c)資本主義的な財政制度とこれによる経済過程の総括を不可欠とする、という3点です。すなわち、資本主義的生産様式というものは、国家と金融・財政制度による総括を欠いては決して存続できないのです。

とすると、資本主義的生産様式としての欧州経済統合の過程は、(1)その経済過程そのものが資本主義経済であるということによって限界づけられているのみならず、(2)資本主義国家、具体的には、(3)資本主義金融制度や、(4)資本主義財政制度によっても限界づけられていることが分かります。このように言うと、一定の根拠を持って、反論が出されるでしょう。「いや、そうではなく、統合される各国の中央銀行は欧州中央銀行に従属し、各国の財政もいずれは解体・再編されずには済まないではないか。したがって、国民国家の破壊こそが問題なのだ」という反論です。しかし、それは事柄の一面を捉えたにすぎないのです。各国の国民国家は次第に死滅しますが、国家は再建されざるをえないのです。すなわち、上掲の(1)から(4)が不変であること、これが越えることのない限界であり、この諸限界の内部で資本主義経済としての変異が起きます。では、各国の何が「限界」であり、それが如何なる意味で突破すべき「制限」として意識されているのか、これが問題なのです。この突破されない(1)から(4)の限界を前提¹⁵⁾にして、如何にして突破されるのか、どの「制限」が突破されるのかを明らかにすることが、この問題に相応しい科学的分析の見地なのです。

5. 「限界と制限の弁証法」と欧州経済統合研究のパースペクティブ

とすると、以下のように問題を整理することが可能となります。すなわち、制限を限界として突破するという場合、

- (a)何が乗り越えられることの無い限界で、
- (b)これを、制限として突破可能な限界とを峻別し、
- (c)経済統合の過程を大きく太く分析するプロブレマティークを提示する必要がある、という事が分かります。

この不動の限界を基礎にして、欧州経済統合は進展します。しかし、欧州統合は、いわゆる「ヒト・モノ・カネ」が自由に移動できる、拡張され、統合された市場が形成されることだと単純に説明されるが、実際にはそう単純ではなく、極めて複雑な過程が進展することが分かります。

すなわち、(1)それ自体は単純である統一通貨が、国境を越えて統一された市場の運動を支持する過程は、欧州各国経済の、既存の多様で重層的な諸機構との相互作用に置かれた移行過程たらざるを得ないのです。この国民経済の中で生み出され来たった重層的機構とは、例えば、各国が置かれてきた民族的国民的特性を持った金融取引手法と、国家、すなわち法と制度に媒介された金融機関のあり方という複雑な経済的構造であり、それを理解して活動する当該国の各経済主体の行為規範との総体であり、この重層的機構と上掲の統一通貨が生みだす多面的な作用との相互作用の全体が問題にされねばなりません。そして、(2)この統合過程で、各国の支配的民族資本相互の競争が激化し、優勝劣敗の帰結を生むでしょう。その結果、(3)経済統合の運動に促された各国は、インフラを整備し、投資を呼びこむための競争を展開し、その財政運営に負荷をかけます。更に、(4)各国の民族的国民的特性を持った財政制度が統合されると、福祉国家的に発展を遂げた国民国家と新自由主義政策に依る国民国家との統合が問題になり、所得再配分などにも支えられた第二次世界大戦後の労働者階級が獲得した生活諸条件の

安定性が震撼されます。経済統合に伴う欧州の発展には、更に、(5)ドイツやフランスのような先進経済大国、旧西欧のその他諸国、旧社会主義諸国から資本主義国へ転換した諸国などが、次々と通貨同盟に参加したことが、より大きな格差を持つ競争をうみだし、問題を複雑なものとしています。

では、今度は、こうした欧州経済統合の過程で変化し、突破される限界とは何かについて考察します。

- (1) まずは、資本主義統一市場へ向かう欧州各国市場の水平的な統合です。これには二つの側面があって、(a)アメリカ、日本、中国、その他新興諸国、今後の成長の期待されるアフリカなどとの対外的な対抗関係の側面で、この欧州の対外関係には、個別企業、業界、国民経済の多様なレベルでの対抗と協調の過程があるでしょう。また、(b)水平的な統合による競争と再編という欧州資本主義の内部関係の側面です。
- (2) 統合された従来の国境と各国国家による総括は漸進的に消滅し、より拡張された資本主義的に再編可能な社会諸領域が形成され、国境を越えた資本間関係の再編がもたらされます。
- (3) これらに相応しく再編された現代資本主義国家(政治・法・制度)の形成と、各国国家諸機能の従属による垂直的な再編です(同様に個別諸資本も、共通市場全体を視野に入れた活動とマネジメントを必要とするため、拡大された規模に対する垂直的な再編を行うでしょう。)

そして、こうした方法的観点に立つことは、問題設定にパースペクティブを与え、個々の分析にとって、その研究対象が占める大きな位置関係の見通しを与えるでしょう。しかし、かつて言われたように、こうした弁証法は、私の先の論文で示したように、世界の根源的な基本法則などではありません。限界、制限とその突破という見地は、あくまで因果関係・根拠・原因などと並ぶ論理学的カテゴリーであって、自然・社会・人文諸科学を通じて諸事象を把握する際の、最も抽象的な「事物の連関」に対応した用語にすぎません。論理のカテゴリーというものは、科学的認識が現実を支配する法則を分析と総合によって発見・記述するための、認識対象との長い格闘を通じて獲得された、事物の連関の抽象的な諸形式です。

そして欧州経済統合の運動は、したがって乗り越えられない限界に規定された資本主義的経済の矛盾する運動諸法則が、その矛盾によって停止しないで、それら諸限界に制約されながら、新たに運動可能な諸形態を生み出す発展過程なのです。

こうした整理を踏まえて、朝日氏の主張に立ち戻れば、欧州経済統合とは、3.で述べたように、資本主義社会として乗り越えられない限界の下で、この4.で説明したような乗り越え可能な諸限界を制限として突破して、新しい可能な現実的運動形態を生み出す過程なのです。

この意味で、マルクスが『資本論』第一巻第一篇の貨幣の「流通手段」に関する以下の叙述は、事物が自らの自己同一性・限界を堅持したまま如何に発展するかということをよく表しているのです。

「すでに見たように、諸商品の交換過程は、矛盾し互いに排除しあう諸連関を含んでいる。商品の発展は、これらの矛盾を取り除き(aufhebt)はしないが、これらの矛盾が運動しうる形態をつくりだす。これが総じて現実的諸矛盾が解決される方法である(Dies ist überhaupt die Methode, wodurch sich wirkliche Widersprüche lösen.)。たとえば、1物体が絶えず他の1物体に落下しながら、また同様に絶えずそれから飛び去るということは、一つの矛盾である。楕円は、

この矛盾が実現されるとともに解決される運動諸形態の一つ (eine der Bewegungsformen, worin dieser Widerspruch sich ebensosehr verwirklicht als löst.)¹⁶⁾である。」

このマルクスの言う「矛盾を取り除きはしないが、これらの矛盾が運動しうる形態をつくりだす」という方法を、新しい諸事象の分析に援用するためには、(1)その諸前提となる分析と論理的な問題把握がどこまで進められているか、更に、(2)事物固有の限界の内部で、事物が如何に変化・発展するかという方法論の正確な理解と継承がなされているかが重要です。後者については、ヘーゲルが立てた論点に沿って言うと「当為、限界、制限」に関する批判的な継承と、個別科学への応用に関する議論の深化が問題です。私は、本稿でそれをもう少し明らかにしたいと思います。

さて、ここで問題にしている欧州経済統合に立ち戻って言えば、この事象の中核に存在する社会的運動法則は、何よりもまず、(1)欧州各国市場の水平的な統合による欧州諸資本の蓄積という法則であり、(2)これによって新しい資本主義的發展の諸条件を確保するため、国家は消滅するのではなく、各国民国家を抑圧・破壊して欧州経済の上に統合した資本主義国家を再建するという法則です。これらを学際的研究によって具体的に明らかにし、せねばならないのです。したがって、各国民国家の破壊に対する国民の権利やそれを保証する制度を守る戦いが必要ですが、同時に、現在、新自由主義的に再建される、新しい統合欧州の資本主義国家の下での改革勢力として、欧州の諸国民とその運動体は、経済活動と国民生活、地球環境とエネルギー利用などの諸要請が真に繁栄と共存とを両立できる、新しいプログラムを生み出す必要があるのです。

そして、ここから言える重要な論点は、欧州のグローバル化や世界経済のグローバル化は、国家を廃絶しない。むしろ、国家は再建され、対内的な国家的総括と対外的な対抗と総括の働きは、現代資本主義経済の不可欠の運動法則であるということです。そして、それは経済のグローバル化は、国家独占資本主義を前提にした経済の国際化の一現象だということです¹⁷⁾。すなわち、この限りでは、現代資本主義は、如何に新しい諸現象に彩られているように見えようとも、いまなお国家独占資本主義という資本主義の質に限界づけられた中での運動に過ぎないのです。

朝日氏の主張に即して言えば、私は、(1)欧州各国市場の水平的な統合と資本蓄積の諸法則を解明することを明確にベースにすえる必要があること、(2)資本主義経済諸法則を「階層性」の見地で捉えることは、直接には、この5.で項目として挙げた(3)の領域に関わるもので、階層性の論点は、重要であっても、水平的な統合と資本蓄積の諸法則を検討した上で述べなければ、その積極性が分かりにくいように思われること、の2点を指摘しておきたいと思います。

こうした指摘を行っても、実証研究を重視される方々からは、そもそもそれは分かりきった抽象的議論にすぎず、方法論よりも、個別科学者はやはり実証研究で説明せねばダメだという批判もあると思います。そこで既存の学説との関連について、わずかながら発言しておきたいと思います。ここでやっている「限界と制限の弁証法」なるものは、簡潔に申しますと、事物が自己同一性(乗り越えられない質・限界、欧州資本主義たること)を保ちながら、なお変化・発展が如何に成立するかという点を問うたものです。しかし、(1)通常、私たちが時系列で論じる発展段階区分、時期区分というのは、その論理的形式からいって、そうした複雑な過程を表現できません。慎重な歴史学者は、その発展段階区分、時期区分というものの限界をよく理解して、これを分析と説明で補います。しかし、時期区分を機械的に振り回すと、この時期区

分の形式に思考と分析が制約されることに絶えず注意を払う必要があります¹⁸⁾。また、(2)ここで述べたように、欧州資本主義は、資本主義的生産様式であるという点において限界づけられているのみならず、資本主義国家、そして、その基本的構成要素としての金融制度、財政制度によって媒介されることによっても限界づけられています。したがって、欧州資本主義の経済統合という変化は、国家という超えることのできない限界の枠内での変化です。これを看過してしまうと、これまでの国民国家の上に建設される上位の国家は、国民国家を超える「超国家」という無規定に国家の規定を拡散させる議論にならざるを得ません。資本主義経済は、資本主義であるという点で限界づけられていると同時に、この経済的土台の上に成り立つ上部構造としての国家や法に媒介された制度によっても限界づけられているのです。この限界のあり方は、後述するように、更に突っ込んで研究する価値のある論点です。

では次に、私が「限界と制限の弁証法」と総称した方法論の問題を検討することにします。

第二節 ヘーゲルにおける当為・限界・制限の弁証法とその批判的な継承

ここでは、(1)ヘーゲルの限界と制限の弁証法の概要と問題点を見て、(2)この見地を継承したマルクスの方法論を、久留間鮫造編『マルクス経済学レキシコン』において編者たちが提示した論点整理とその特徴を検討することで明らかにします。最後に、(3)当初の欧州経済統合などの現代社会科学の課題に立ち戻って、この方法をどのような方向で展開させるべきかを検討します。

1. ヘーゲル「有限性(c)有限性 β制限と当為」の考察の概要とその問題点

ここでは『大論理学』有論におけるヘーゲルの「有限性」の研究を取り扱います。もちろん、私たちは個別科学者として、ヘーゲルの観念論を前提にした論理学の考察をそのまま受け取るわけにはいきません。私は、先に公表した論文の続編として、科学的認識の基礎をなす分析的方法、自然や社会を背後で支配する法則を発見するために分析的方法と総合的方法を基礎にして、ヘーゲルの論理学研究の合理的な核心を取り出すように努めます。

ここでは「有限性」の中の「β制限と当為」に直接は入りません¹⁹⁾。

a. 即自有と限界の統一による自己反省の関係

ここで取りあげる有限性の直前で、ヘーゲルは「規定と性状」について考察しています。ここでは、事物が存在するとして、その外面的な定有が「性状 (Beschaffenheit)」であるのにたいして、そこに自分を指定して、それらを統一する働き、すなわち「規定 (Bestimmung)」²⁰⁾とを対にして考察しています。これまでのように有を単純にツルツとした一まとまりのものとして考察するのではなく、ここでは有が、(1)性状という無数の他者との連関・共通性を持ちながら、(2)規定が全体の自己同一性を与えています。そこで、この或るものは、一つの規定・即自有を持ち、規定と性状が区別しつつ支えあい、調和する「自己反省」²¹⁾の関係を表していました。

これにたいして「制限と当為」では、二つの即自有 (限界・規定) を持ち、それらが互いに本質的なものとして共存し統一されています。二つの即自有が統一されることで、静止的に有を考察してきた、それまでの有 (存在) の研究は、有の運動へと進展するのです。

しかし、先原稿で示したことと同じように、ここでも、(1)こうした一つの即自有とその中の規定と性状の調和関係から、二つの即自有が共存する事物とその運動への移行を行うことは、

より複雑な新しい事象を感性的認識として、計画的に取り入れ、それを分析することでしか与えられません。しかし、(2)ヘーゲルでは、規定と性状を考察する条件を密輸入することで、「規定と性状」という概念が「制限と当為」へと自己展開するかのように描くのです。したがって、『大論理学』の「 β 制限と当為」の冒頭の二つのパラグラフには、私たちの思考が前進する過程であるにもかかわらず、先行する概念から新しい概念が自動的に生み出されてくるような記述になり、それがヘーゲルの文章の読解を非常に困難なものにしているのです。しかし、そうした概念の自己展開の記述方法をとりのぞいてみれば、この部分では非常に合理的な分析が行われ、観念論の弊害も少ない部分といえます。では「 β 制限と当為」の内容に入ります。

第一に、或る運動主体としての事物があります。それは、その事物たること、ヘーゲルではこれを「即自有 (An-sich-sein)」といいます。これは、そのものの対外関係、すなわち「向他有 (Sein-für-Anderes)」に対立します。向他有がその事物のもつ他の事物と共通するものであるのにたいして、即自有は、そうした他の事物と区別されてある、この事物を固有のものにしている存在です。そして、第二に、同じ事物が、本質的にこの即自有を否定するもう一つの即自有をもちます。すると第三に、この事物は、両者が統一されることによって、ある重要な関係を有の内部に持つこととなります。ヘーゲルはこういいます。

「[1] それは或るものの即自有的な規定の限界にたいする関係であるが、それも或るもの内在的な限界を或るものなかで否定するという関係である。この意味で、自己同一的な自己内
有は自分自身の非有 (Nichtsein) としての自分自身に関係する。[2] しかし、この非有は否定の否定という意味をもつ。いいかえると、[3] この非有は或るものの自己内
有だという点で、そのなかに同時に定有をもっているところのものを否定するものだという意味をもっている。」²²⁾

この引用では、(1)或るものの即自有としての規定が、そのものの限界と対峙する関係を取りむすんでいる、その限界は、(2)或るものの即自有、すなわち、そのものをそのものたらしめている規定を否定して、そのものの特性を殺してしまうような対極をなしており、したがって限界は非有といわれるのです。しかし、(3)この限界・非有は、或るものの即自有の外部にたまたまあったというのではなくて、まさに或るものが自己同一性を保つ自らの中に具備した限界であり、非有だということです。したがって、ここに成立する関係は、(4)或るものが自ら抱えた、生きるか死ぬかという矛盾なのです。一見、難解に見えるこの説明はどのような意味を持つのでしょうか。

ヘーゲルは論理的な考察に際して「概念の自己展開」²³⁾という姿で描き、実際にはヘーゲル自身もっている具体的な事物のイメージとその分析過程を、常に隠しています。そこでこれを分かりやすく言い換えてみると、こうなります。

ここに将来を嘱望されたスポーツマンがいます。(1)彼が彼たる所以は、その種目に適合した高い身体能力です。この場合、この種目と身体能力が彼の「即自有」です。これがあってこそ、彼は陸上競技のアスリートとして更なる記録更新が期待され、支援が寄せられているのです。しかし、彼は体が小さい。国内競技大会では問題にならないとしても、世界大会に出場すれば、その体格の不足は明らかです。この場合、(2)これが彼の即自有に対峙している「限界」です。それは、場合によっては、彼の将来をダメにしかねない非有 (有の否定) なのです。彼の高い身体能力も現実的ですが、これは彼が他の競技などに行けば、そこでもやっていける可能性でもあるが、ここまできたのも、この身体能力を基礎にしてこの競技で一貫して練磨してきたからです。だから、彼の即自有もまた一つの限界なのです。また、分かっていたことで

すが、日本を代表する選手になった（即自有）今、世界ランカーたちとの体格差は本当にリアルな問題（限界）になってきています。才能あればこそ、今、体格不足が現実的な問題として彼に立ちふさがっているのです。今、彼は瀬戸際に立っているように感じています。なぜ、これが「否定の否定」とされるのかといえば、彼の即自有にたいして制限は前者にたいする後者の否定ですが、その否定を前者である即自有は否定しのみこえねばならないからです。陸上競技の選手である彼は、そうした矛盾した自己関係をもっているのです。

ヘーゲルはこうした多様な事物の動的な過程をとらえる論理的カテゴリーの研究の一貫として、即自有や限界というカテゴリーを有論の「有限性」の中で考察しているのです。

b. 有論における静止的な有限な事物の考察から運動の考察へ

これらのことをヘーゲル流にいうと「自己同一的な自己内有〔即自有〕は自分自身の非有〔限界〕としての自分自身に関係する」²⁴⁾のです。ヘーゲルは続いています。

「このように、〔1〕或るもの自身の限界が或るものの否定者であると同時に、その本質的なものでもあるということになると、それはもはや、たんに限界そのものではなくて、むしろ制限(Schranke)である。しかし、〔2〕制限はたんに否定されるものとして措定されたわけではない。ここでここでは否定によって否定されるものとして措定されたものこそ限界なのであるから、否定は両刃的である。すなわち、限界は一般に或るものと他のものとの両者の共有物であるが、また規定そのものとしての即自有の規定性でもある。(3)したがってこの即自有は、即自有と区別されてもいる自分の限界、すなわち制限としての自分にたいする否定的関係として、当為(Sollen)である。」²⁵⁾

ここでヘーゲルの考察は一步前進します。「自己同一的な自己内有は自分自身の非有としての自分に関係する」という自己関係の成立によって、いわば前進の衝動を持つようになることを解き明かそうとします。すなわち、(1)即自有（日本を代表するアスリートたること）ももとより本質的であり、限界（世界に比して劣る体格）もまた本質的であるとすると、この限界はもとあった以上の意味を持つのです。すなわち、(2)限界は即自有によって突破されるべきものという定在を獲得します。これがここにいう「制限」なのです。反対に、即自有は、自分自身の属性である限界を、突破すべき壁、すなわち「制限」と位置づけることになり、そうした発現を通じて、自分自身は事物の変化・発展を促す主体性、すなわち「当為（かくあるべきこと）」であることを明らかにするのです。したがって、この分析を通じて、或るもの、運動主体は「当為」であることが明らかになるのです。通常、極めて主観的で道徳的なものとして用いられる「当為」を事物の存在と運動の問題として再発見したのです。ヘーゲルの偉大な点です。

しかし、肯定的に引用したヘーゲルの発言も、前後の叙述の中においてみれば、即自有と限界の関係から、概念的に「制限と当為」が自己展開・導出されるように記述されているのです。そうではなく、本節冒頭に述べたように、ヘーゲルは新しい事物の運動様式を設定して、それを分析しているのです。しかし、概念の自己展開というシェーマに歪曲されて、(1)有は定有となり、定有は向自有になり、境界線が曖昧な体系の叙述が、必然的に生まれ、(2)各々の論理的カテゴリーの明確な定義がなされない論理学が生まれ、(3)その合理的な核心は継承されるべきでない観念論に封じこめられたのです²⁶⁾。この意味では、私たちはヘーゲルの観念論とそこからくる過度の叙述の難解さから開放された論理学が必要だと思えます。

さて、これを先程のアスリートの事例で考察するとこうなります。先に述べたように、即自

有として陸上競技に秀でた彼は、体格で劣るという限界を、突破すべき制限としてとらえます。世界各地を転戦しながら、優れた選手と対戦し、彼らとの競合の中で経験をつみます。すると、突破すべき制限は、より明瞭になると同時に、突破しようとする当為もまた育まれていきます。しかし、体格が制限であるならば、彼は体格の制限をこえることができません。そこで変容可能なその他の技能領域でこれを運動可能にする方略を探しもとめるという運動が開始されます。こうした長い選手生活を支えるのが、多様な試行錯誤の試み、深い研究心であり、厳しい自己管理でしょう。それはまだ出現していない自分を実現する動力となる、実在する当為です。

こうした「制限と当為」について、見田石介は次のように総括しています。

「本質的なものでありながら、同時に否定されるものとしてはっきり意識された限界、これが制限です。限界と、それを限界としてのりこえてゆこうとするものとの関係、こういう二重関係になったばあい、その限界を制限というわけです。」²⁷⁾

では、当為を担うある運動主体は、「前進の衝動」をもちます。この場合、見田氏もいうとおり²⁸⁾、二つの方向があります。それは、(1)当為と制限とが完全互いの壁を溶かしきって肯定的存在になる場合と、(2)二重物になって動きだす場合です。本稿でとりあげた欧州経済統合の場合は、(a)欧州統合加盟諸国の相対的な自立性と自律性を認める「肯定的統一」の段階から、その自立性と自律性を奪い、あたかも一国のようになる「否定的統一」の段階へ移行すると把握することが可能です。また、(b)欧州統合を行うために通貨統合を達成したとすると、もはやその動きを止めることはできません。経済関係では、安定成長協定、欧州セメスター、ユーロプラス協定、財政協定など財政的統合や、単一の銀行監督制度・破綻処理制度、預金保険制度の一元化など銀行同盟の形成に向かわざるを得ない軌道の中に、加盟各国が投入されます。この限りでは、欧州経済はまさに二重物になって動く過程なのです。

c. ヘーゲルの「当為」とその実在性

この点を踏まえて、さらに進みましょう。すると、上掲のヘーゲルの分析は、即自有の意味を変化させています。すなわち、即自有が、上掲の分析を踏まえて新しい意味を付与されているのです。すなわち、事物の核に観念的に含まれており、いまだその姿を現わしきれていない他者があるという意味の即自有です。自分で自分を否定している、自分から自分の限界をこえる関係です。これが先に有（存在）の静止的な考察から有の運動の考察へ向かうということの意味です。

そして、その前提となりますが、当為という概念は、通常、まさになすべきこと、あるべきこととして、主観の外にある現実と自然必然性に対立する概念と理解されています。それはカント哲学の定言的命命、すなわち、無条件に善なる行為を命ずる当為のように、天上から与えられたかのような実在から遊離する意志という意味があります。

これにたいして、ヘーゲルがここで論じている当為は、きわめて客観的実在的な当為であり、自然や社会、そして人の行為など、そのものに固有の運動法則を把握するという意味が与えられています。

このようにヘーゲルは「有限性」の考察の中で、観念論としての制約や概念の自己展開過程として論理学を記述するという姿勢によって、自らの研究の真価が覆い隠されていますが、事物の変化や発展というものを、非常に丁寧に観察していることが分かります。限界や制限という用語と並んで用いられている「当為」も、通常の主観的な意味がなくなり、非常に客観的に事物の変化しようとする動機としての意義が与えられているのです。こうした事実に対するり

アルな観察の精神は、マルクスの研究へと受けつがれたのです。

2. マルクスにおける「限界」と「制限」

次に、マルクスの経済学研究における限界と制限について検討します。マルクスには、体系的な論理学研究がありませんが、経済学研究の中にヘーゲル論理学の合理的側面が数多く継承されています。そして、彼の完成した著作である『資本論』ではこうした論理的カテゴリーの意図的な使用は抑えられているのに対して、その原稿である『経済学批判要綱』では、限界や制限の用語法はよりヘーゲルに近いものがあり、彼の論理的カテゴリーの活用法がより鮮明になります。全体的に見ると、『資本論』と『経済学批判要綱』の両者には、本質的な相違はありませんが、論理的諸カテゴリーの研究のためには、その後、経済学批判体系を『資本論』として大きく太く示すために、諸論点の論理的な連関を手短かに書きとどめるために、より方法的な記載が行われているため、以下、そうした箇所を取りあげて研究します。

第一に、資本というものの規定が自己増殖を求める無制限の衝動であるという点についてのマルクスの分析です。

「だが富の一般的形態—貨幣—を代表するものとしての資本は、自己の制限をのりこえようとする無制限・無限度な衝動である。どんな限界でも、資本にとっては制限であり、また制限たらざるをえない。でなければ資本は資本—自分自身を生産するものとしての貨幣—であることをやめることになろう。……しかし、資本は、より多くの剰余価値をつくりだそうとする不断の運動である。」²⁹⁾

資本主義的生産様式においては、一定量を超えた貨幣はただ貨幣として留まることは許されず、自己増殖を目指して資本主義的な循環の運動に投げ込まれなければなりません。それは使用価値の獲得を目的とせず、自己増殖を目的としますから、いくら増殖しても、その定量からまた増殖せねばなりません。この運動をとおして、自己増殖に障害となる限界を無制限にのりこえる動機を獲得するのです。守りに入れば競争に破れ、資本であることをやめてしまいます。これはヘーゲルのいう「当為」に当たります。しかし、主観的な定言的命令ではなく、各人の意図を越えた客観的な当為なのです。

しかし、こうした資本の規定を明らかにする際に、マルクスには大前提があります。すなわち、資本主義は、人類の長い歴史の中の一定の条件下で生まれた、或る歴史的で特殊な生産様式・経済関係であり、恒久不変の生産様式なわけではありません。そこで、マルクスの方法では、こうした制限は、人類史を貫く「生産一般」の限界や制限ではありません。特殊歴史的な資本主義的生産様式に固有の生産の規定であり、それに固有の制限なのです。このことをマルクスは次のように記しています。

「問題は次の点にある。——何よりもまず、生産一般ではなく、資本の上のうちたてられた生産に固有な限界がある。」³⁰⁾

「だから、資本はその本性上から、労働と価値創造にたいして制限を措定するのであるが、この制限は、それらを無制限に拡大しようとする資本の傾向と矛盾している。そして、資本はそれに特有な制限を措定するとともに、他方では、どんな制限ものりこえていくのだから、それは生きている矛盾なのである。」³¹⁾

生産一般ではなく、その特定の歴史的形態である「資本の生産」には、労働と価値創造にたいして歴史的な資本としての制限を加えているので、一方で、生産と価値創造は無限に拡張し

ようにする傾向があるにも関わらず、他方では、労働者への支払いが厳然と抑制されます。それは、用語こそは使われませんが、当為と制限の相互作用による矛盾した運動となるのです。しかし、そこで運動が停止するのではなく、この制限をのりこえていこうとする運動と、これに特有な制限もまた絶えず生み出され続けるという「生きた矛盾 (der lebendige Widerspruch)」に駆り立てられて資本主義的生産は運動するというのです。このように資本の概念は、生きた矛盾として現実を動かすものと捉えられています。それは極めて単純な形式を持つ分析ですが、事物の本性を明らかにするものです。

第二に、資本は資本であるから、これに固有の制限の中にあります。そして、資本であることは、資本にとってはのりこえるわけにはいきません。したがって、資本蓄積の運動は、一方で、制限を措定しつつ、他方で、この制限をのりこえて生産と価値創造の拡大に邁進します。

では、生きた矛盾にドライブされる資本蓄積には如何なる制限があるのでしょうか。原典に当たって全ての箇所を収録した、久留間鮫造編『マルクス経済学レキシコン』では、その索引において、膨大な種類の諸制限が整理されています³²⁾。ここでは、この「生きた矛盾」に駆り立てられた資本蓄積の運動とその制限が、(1)「信用制度」の登場によって突破され、(2)世界市場の形成に向けた運動を生み出すことを述べているところをあげましょう。

「資本主義的生産の対立的な性格にもとづいて行われる資本の価値増殖は、現実の自由な発展を或る点までしか許さず、したがって実際には生産の内在的な桎梏と制限とをなしているのであって、この制限はたえず信用制度によって突破される、ということである。それゆえ、信用制度は生産力の物質的發展と世界市場の形成とを促進するのであるが、これらのものを〔1〕新たな生産形態の物質的基礎として或る程度の高さに達するまでつくり上げるということは、資本主義的生産様式の歴史的任務なのである。それと同時に、〔2〕信用は、この矛盾の強力的爆発、恐慌を促進し、したがってまた古い生産様式の解体の諸要素を促進するのである。」³³⁾

信用制度の働きによって、生産の内在的な桎梏と制限は突破されます。しかし大事なことは、信用の介在によって、特定諸資本の蓄積制限が突破されたとしても、生産の内在的な制限である消費の狭隘さという限界が消滅したわけではありません。この限界と矛盾は厳然と存続します。このことが、引用文の〔2〕の運動をひきおこします。これは、上述したように、矛盾を解消しないが、この矛盾が運動しうる形態をうみだしたことを如実に示しているのです。

と同時に、証券発行による資金調達や、耐久消費財が登場する20世紀なら消費者割賦信用の登場などの信用の供与によって、この限界を消滅させることはできませんが、信用諸形態の創出によって蓄積の制限を運動可能にすることができます。そして、再生産過程と信用が生み出す弾力性は、生産の突然の膨張を可能にする生産的潜勢力を持つため、外延的または内包的に賃金増大による好循環も生み出しますが、その諸行程の全体は上述の限界の中にあります。

第三に、では資本蓄積はかくして如何なる行程を辿るのか。これは『要綱』の叙述ですが、限界と制限をきっちりつかい分けて説明しています。

「資本がこのような限界をいずれも制限として措定し、したがってまたそれを観念的にのりこえたからといって、けっして、資本がその制限を現実克服したということにならない。そしてこのような制限はいずれも資本の規定に矛盾するから、資本の生産は、たえず克服されるが同様にまたたえず生みだされる諸矛盾のなかで運動する。それだけではない。資本がいちずに指向する普遍性は、資本自身の本性のうちに制限をもっているのであって、この制限は、資本のある一定の段階で資本そのものがこの傾向の最大の制限となることを認識させ、したがって

また資本そのものによる資本の止揚に追いやることになる。』³⁴⁾

こうした現実の資本主義の運動は、もっと多様な本質のない些細な事件に覆われているでしょう。しかし、マルクスは、資本の概念と基本性格を明らかにし、そこから現代にいたる資本蓄積の運動の基本方向をしめしたのです。この最後の引用文すなわち、こうした考察に、絶えず方法を意識して事物を包括的に把握するマルクスの研究の特徴が現れています。

では、こうした限界と制限の弁証法に表わされた事物の運動は、ヘーゲルやマルクスに固有のもの、或いは、社会現象に固有のものでしょうか。そうではありません。自然界に存在する事象とその接続の中にも見られるものです。この点を次の節で検討しましょう。

第三節 生物の発生過程と限界・制限 — 本田久夫『形の生物学』を事例に —

本多久夫氏は、理論生物学者として、ご自身の研究成果と現代生物学の研究を総括されて『形の生物』³⁵⁾を著わされました。氏は、この著作の課題として、(1)多細胞動物の発生過程を研究して、個体の形成のされ方が「袋」とその形態形成という「共通原理」から説明可能であることを示し、(2)いかなる多細胞動物にも共通の原理と、それぞれの動物が示す形の多様性という矛盾したものの繋がりを説明されています。私は、この生物の形に着眼した研究の中に、本稿で研究している「限界と制限」の活きた事例をみいだします。そこで、氏の見解を簡単に解説し、それが如何なる意味で「限界と制限」の典型的な事例となるか、さらに個別科学の制限を超えた方法論的な考察となり、私達の個別科学の研究課題を攻略する意義を持つことを明らかにしたいとおもいます。

1. 身体の表面は「上皮シート」でおおわれている

氏の研究の意義を理解するためには、まず、生物の表面が「上皮シート」でおおわれていることを理解しておかねばなりません。私たちの身体が、皮膚という上皮シートでおおわれているだけではなく、口から口腔、食道、胃、小腸、大腸、肛門というように、体の中の消化器官に入り込んで、私たちの体は一貫して上皮シートでおおわれています。また、口腔に向かつては唾液腺が開口し、その奥は枝分かれています。口腔からは、咽頭蓋を経て肺へ、したがって気管、気管支、肺胞へと広がっています。同様に、十二指腸からは、膵臓と胆嚢や肝臓に向かう枝分かれます。また、皮膚から膀胱を経由して腎臓にも管が入り込み腎臓に達します。乳房では乳腺にいたる行き止まりの管があります。こうした私たちの身体を概括すると、皮膚も胃や腸の内壁も、実は身体の外側であり、上皮組織の種類は違いますが、全て一まとまりのシートで、身体の内外が分け隔てられていることが明らかです。このように理解すると、本多氏が、上皮組織という言葉がありながら、上皮組織が形成する身体の内外を区別する境界を、それが面であることを強調するために、包括的に「上皮シート」という語で強調される意味が理解できます。さらに、この上皮シートでおおわれた身体には、脾臓や肝臓、乳腺のように行き止まりになっているものや、消化管のように、身体を貫いたトンネルもあり、循環器系や神経系のように、体内に埋没している上皮シートもあることがわかります。また、消化管といっても、単なる管ではなく、腸絨毛という小さな突起でおおわれており、極めて複雑な袋の構造をしています。本多氏は、実際の成体の組織が極めて複雑であることから、この袋構造を「フラクタル的なこみ入った袋構造」³⁶⁾と呼んでおられます。

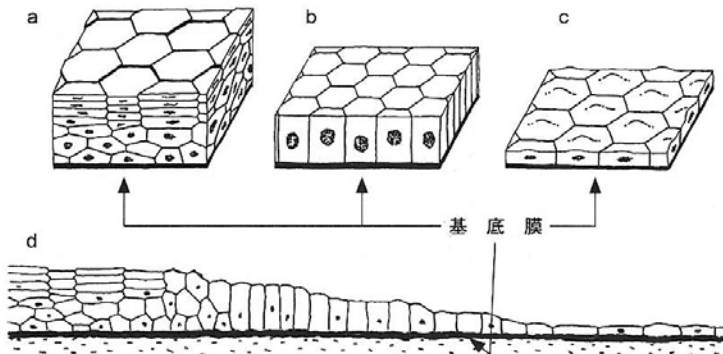


図1 上皮シートの構造と多様性
 a 扁平多層上皮 (皮膚等), b 柱状上皮 (消化器等), c 扁平単層上皮 (肺等)
 d は, a から c が, 一つの基底膜の上でひと続きのシートになりえることを示す。[本多 1987]

2. 本多氏の問題設定 — 袋の構造と形の生物学 —

こうした「上皮シート」と袋の構造から生物の形の発生過程に迫るために、基礎的なこととして、(1)上皮シートとはどのようなものかについて説明します。さらに(2)成長した身体がもつ、このような「フラクタル的なこみ入った袋構造」は、その発生の出発点ではどのように単純なものであったのかを明らかにします。さらに、(3)発生過程の端初にある、この単純な袋の構造からフラクタル的なこみ入った袋構造へ変容する過程を問題にして、本多氏がどのように問題設定されているかについても考察します。この最後の点には、氏がみずからのご専門を「理論生物学」と称される真骨頂が現れています。

そこで、第一に、上皮シートとはどのようなものであるかについてです。

上皮シートは、巨大分子でつくられた網目である基底膜の基礎の上に上皮細胞が乗ってできています〔図1〕。基底膜の上に形成される上皮細胞には、扁平多層上皮 (皮膚など)、柱状上皮 (消化管など)、腺上皮 (膵臓など)、扁平単層上皮 (肺胞など) などの多様性があり、本文にあるように、一続きのシートをなしていても、皮膚、消化管、肺胞などに変異を遂げることになります。それゆえ、上皮シートとしての共通性は、基底膜ということになります。それで、一見、皮膚とは違うように見えても、皮膚、消化管、肺、腺などは一まとまりのシートとして同一性をもっているのです。したがって、この同一性を見地にたてば、ヒトデが自分より巨大なカニやエビなどの獲物を、体内から胃を外にだして包み込んで消化をするのも、マンタというエイが、消化管を体外に出してその内部を洗うという「腸洗い」を行うもの、けっして不思議ではないことが理解されます。腸内細菌も体内にいる訳ではなく、体外にすんでいるのです。

では、第二に、上述のように、成長した体は、複雑なフラクタル的なこみ入った袋構造をしています。個体の発生過程の端初はどのようにでしょうか。

受精卵から多細胞動物の成体ができる過程を生物学では「発生過程」と呼びます。一つの受精卵からはじまって、やがて単純な「胞杯」と呼ばれる袋構造ができます。この袋構造は、一つのシートで端がなく、球形になっています。本多氏は、わかりやすい例として棘皮動物のヒトデの胞杯形成の過程を示されています〔図2〕。胞杯が形成されると上皮細胞は一層に並んできた上皮シートが球をかたちづくり、後に皮膚や消化管などとして液体や空気に接する表

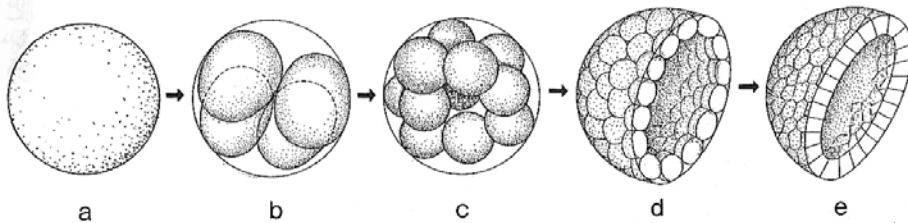


図2 受精卵から胞胚ができるまで
一個の細胞である受精卵aが分裂を繰り返して（bからd）、上皮シートでできた袋である胞胚（e）を形成する [本多 1991]

側を「アピカル側・自由空間側」と呼び、袋の裏側、すなわち内側に基底膜があります。

胞杯の構造は極めて単純です。上皮シートが閉じた球面となり、生物の内と外の仕切りが完成します。それまではただ細胞の塊であったものが、こうして仕切りを完成させるのです。これは成体の形成のまさに第一歩です。その結果、(1)内部のものがむやみに外部に出ず、外のもものが簡単には内部に入り込まないように、(2)自立した個体として一つのゲノムを引き継ぐ主体を、進化の過程として確立し、(3)この袋という共通の原理の下で、同じ袋の形を変化させることで、形の多様性への道を開いたのです。

3. 胚胞という袋の形成から、フラクタル的なこみ入った袋構造への発展へ

この上皮シートと胚胞という単純な袋の形成を踏まえて、本多氏は、問題提起を行います。これが第三の問いです。そこで、本多氏は、多細胞動物が胚胞という袋の構造を獲得したことが、その後の生物進化に一定の方向性を与えたこと、それが多様性成立の共通の土台としての「上皮シートの変形」という運動法則であるとして、次のように述べます。

「進化の歴史を考えると上皮シートの袋の完成までは、多細胞動物それぞれが独自の試みを数多く行ってきたに違いない。しかしいったん袋ができてからは、個体の形成のされ方は基本的に共通である。／胞杯という単純な姿と、これからできる成体——脳や脊髄があり、眼や耳、肢のある成体とは似ても似つかない。しかし単純な袋から、袋を構成している上皮シートが変形していろいろな器官をもつ動物体がつくられるのだ。多細胞動物の器官づくりについては、これまで発生学で詳しく明らかにされてきたことなのだが、ここで今一度シートの変形を頭において、シートには基底膜側がウラという表裏の区別があるという視点から概観しよう。」³⁷⁾

すると、従来の発生学で記載されている事実が、本多氏自身が言及されているとおり、トポロジー (topology, 位相幾何学) を援用するような、球形をなす「上皮シートの変形」が問題となるのです。

すなわち、球形の一点が内側に落ち込んで行き、球の反対側に開口すると、いわばドーナツの形状になります。これは上皮シートの「融合・つなぎ変え」です。実際に、ウニの胚胞が泳ぎ回る幼生になる過程で、球形の胚胞にトンネルが形成されます。この開口部の穴が口となり、最初の凹みが肛門となります。この形成過程が「原腸形成」です [図3]。

脊椎動物では、背骨の形成より早い段階で神経管が形成されます。これはチューブ構造で、成体内に埋没しています。その形成は、外胚葉シートが一行に凹んで落ち込み、一行の対岸同士が融合して、上皮シートから体内に落ち込んで神経管となります。

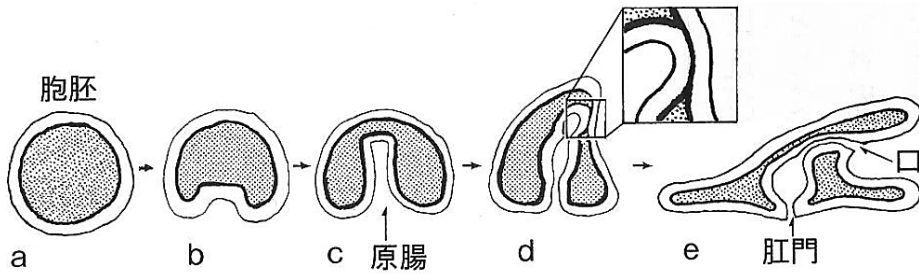


図3 ウニの原腸形成

胞肺 (a) に凹みができ (b), 凹が深くなって原腸と呼ばれるトンネルになり (c), トンネルが開口して口ができる (d, e)。もとの凹みは肛門になる (e)。dの四角形で示したところが口ができるのだが、ここで上皮シート同士の融合・つなぎ変えが起こっている。[本多 1991]

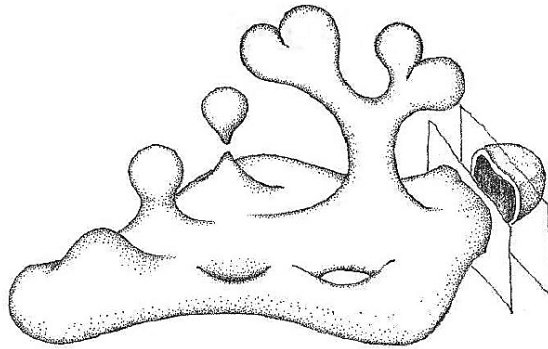


図4 上皮シート変形の多様性

上皮シートには、基底膜の有無でウラ面とオモテ面がある (右切断面)。シートは閉じた袋になっており、(1) ふくらんで突き出て、さらにちぎれて独立の袋になったり、分岐したりする。また、くぼみができ、深くなり、向こう側のシートと融合・つなぎ変えを起こして穴があく場合もある [本多 1991]

かくして、神経管の先端に脳胞とならんで形成される「眼胞」の突端である眼杯前方が後ろに向かって落ちこむことで、内側に網膜を形成し、その前にレンズが形成される。外胚葉シートから凹んだ部分がシートから切り離されて、耳胞となり内耳に変化する、さらに、血管、体腔膜など、体のあらゆる器官が上皮シートから形成される過程が概括され、これらの上皮シートの変形が、いかなる原理で制御されているかに説きおよんで行くのが、本多氏の著書です。本多氏は、その著書の目的を次のように概括しています、

「[結晶や水滴、風紋などは物理学の法則で解明できる。これにたいして] 生物に共通することは、生きて、親から子へと代々続くことである。生物は続きながら、形をつくり、形を維持している。したがって生物の形の背後には、物が形をつくる物理法則以外に共通したものが潜んでいるに違いない。私はそれを、多細胞動物では『袋』であると考えている。・・・/本書は多細胞動物の袋構造に注目し、袋の実体と袋の形成のされ方、および袋の果たしている役割について述べるものである。」

「進化を考えることで、どの動物も基本的な形は袋であるという共通性とそれぞれの動物が示

す形の多様性という一見、矛盾するものにつながる。進化は袋の形成という共通原理に基づいて、形の多様性をつくり上げている。」³⁸⁾

そこで、本多氏は、袋構造における上皮シートの変形、融合とつなぎ変え³⁹⁾を、ごくわずかのパターンに還元して示しています〔図4〕。私は、これが明らかに従来の研究に新しい原理を付加する研究であるとかんがえます。

氏の研究は、実証的な発生学の研究成果を踏まえながら、生物の形（=器官）の発生を明確な方法意識をもって整理し、個体の発生過程を研究しながら、進化の理論と緊密なつながりを持つ、極めて一般化された共通原理を提示したといえます。それは、私たち社会諸科学におけると同様に、限定された経験科学の特殊研究に大きな観点からの見通しを与え、研究の道標をさしめすような普遍的な研究であるといえます。

4. 形の生物学と限界・制限という方法論

そこで最後に、本多氏の生物学的研究と「限界・制限の弁証法」との深い同一性について、本稿の観点と成果からみて整理しておきましょう。

第一に、多細胞動物の発生過程を、極めて単純な胚胞の獲得という基礎の上で説明を試み、一方で、発生過程にある個体の成長と機能分化の要請＝客観的な当為を示し、しかし、第二に、この発生主体には、進化の方向性として課せられた、これに固有の乗り越えることのできない制限があることを示しました。すなわち、多細胞動物は、その発生過程において生命活動を維持するために、獲得した袋構造を片時も解消してはならず、如何なる器官の形成においても、袋の仕切りが一度も破られることなく、行わねばならないという制限があることを示しました。そこで第三に、そのためには、上皮シートの変形、すなわちシートの「融合とつなぎ変え」という制御手段を生み出すことで、上掲の制限を、消滅させることはできないが、その事態を行き止まりにしないで、発生可能な運動形態をうみだしたのです。

このように、ヘーゲルがその論理学研究で発見・記述した「限界と制限の弁証法」は、マルクスの資本関係の分析など、社会科学的研究においても、発生過程の研究など、自然科学的研究においても、通常の形式論理学的な常識をくつがえして、事物の運動・発展をいきいきと解明するのに有効な意義をもっており、新たな経験的事実の研究のための有効な手段として学習し、研究する価値があるということが明らかとなります。

結論 分析的方法を前提とした限界と制限の弁証法とその可能性

最後に、本稿の研究を踏まえて「限界と制限」という論理のカテゴリーを活用する上で、さらに研究すべき課題を記しておきます。

第一に、今後の研究の深化のための原則であるが、ヘーゲルでは、事物の必然性を示せないとして否定された近代科学の分析方法（分析と総合）を基礎にして、分析的方法の制限性を補完するようにして、弁証法的方法は活用されねばならないということです。この点を無視すると「弁証法的唯物論」は科学ではなくなり、20世紀を代表するイデオロギーになってしまうでしょう。私達は20世紀以降の科学からもっと学ばなければならないと考えます。

第二に、「限界と制限」といった場合に、久留間鮫造編の『レキシコン』の索引を見ても、恐慌現象の説明に関連して「限界と制限」の語が多数収録されているようにおもわれます。その

場合、再生産過程や信用によって与えられた弾力性を汲みつくして突破された資本の内的な諸制限は、突然の生産の収縮によって補われます。この場合、まさに限界・制限・突破の語は、恐慌と産業循環をテーマとして利用されることになります。この場合、課題とされているものは「恐慌は、独立化した諸契機のあいだの統一の強力的な回復であり、また、本質的には一つのものである諸契機の強力な独立化である」⁴⁰⁾ 経済的な運動諸法則です。それは、生産に衝撃を与えてその突然の膨張を引き起こす運動が生まれ、これが前提となって、今度は生産の突然の収縮が発生するのです。この波動が産業循環を成立させます。

しかし、これを新しい諸現象にそのままあてはめることは適切ではないと考えられます。すなわち、本稿で私たちが研究しているのは、欧州統合という従来の国民国家の間の壁を破る水平的な諸制限の突破、そしてそれに伴う国家機構の垂直的統合と再編です。また、自然現象ではありますが、肺胞を起点にして、上皮シートの変形を通じた諸器官の分離と形成です。それらは、限界を制限として突破するものですが、循環的な運動ではなく、構造的な複雑化と高度化をとともなう変化であり、発展です。制限を突破する運動領域には、かつて自由競争段階では、この循環的な運動が中心に観察されたように思います。しかし、資本主義経済の歴史的発展は、経済構造、国家と制度、それを支える上部構造などの構造的な複雑化と高度化によっても支えられていると考えられます。これを明瞭に区別すれば、後者の構造的な複雑化と高度化を、恐慌論の図式に解消してはならないといわねばなりません。反対に、前者の恐慌現象を、後者の構造的な変化に解消してもならないでしょう。この点は、本稿を越えて、もっと事実を分析することによって回答を与える必要があります。また、この点に見田石介の研究の限界があると思います。

第三に、資本主義的生産様式と資本主義国家とは、経済的土台と政治的上部構造という大きな異なる系でありながら、この異次元の二つのレベルでも、限界と制限の間の不可分の関係がありました。こういう方向への論理的なメスを入れる課題もまた存在すると思います。

ヘーゲル論理学の「有限性」の中には、さらに後段の叙述において「全体と部分」の「全体(Ganze)」とは区別される「総体性(Totalität)」など、なお言及すべき論点があります。これは今後の課題にしたいと思います。

注・文献

- 1)ここに言う危機の原語は、ドイツ語でKriseである。しかし、この語の扱いは、従来言われてきたように注意を要する。Kriseは経済用語で言えば「恐慌」ということになる。しかし、政治学的に使えば「政治的危機」という意味を持つ。本稿は、古典的記述の解釈も含めて、両者を峻別すべきだという立場に立ちます。この用語の両義性にも関係して、資本主義経済の現代のあり方を一面的に歴史的衰退と把握する考え方をここでは「全般的危機論」と見ています。
- 2)ユーロの決済機構 Trans-European Automated Real-time Gross settlement Express Transfer systemで“Target”と略称される。この第二世代に当たるのが、2007年11月からのTarget 2と呼ばれる。朝日編に並んで以下の文献を参照せよ。奥田宏司「ユーロ決済機構の高度化(TARGET 2)について—TARGET Balanceと「欧州版IMF」設立の関連—」『立命館国際研究』第24巻第一号、2011年。
- 3)先行研究の中で、私は以下のものを前提としている。見田石介『ヘーゲル第論理学研究①』(大月書店、1979年)のpp.170-180における「制限と当為」の記述など。
- 4)見田石介の方法を継承して、いわゆる「全般的危機論」に「資本の生命性」を対置して研究の方向性

を示したのは上野俊樹の貢献である。『上野俊樹著作集 第五巻』文理閣、2001年。

- 5) 朝日編『欧州グローバル化の新ステージ』文理閣、2015年、P.13。カギ括弧内は筆者の補足（以下の引用も同じ）。
- 6) 朝日、前掲書、P.i。
- 7) 朝日、前掲書、pp.i-ii。傍点は筆者。
- 8) 朝日、前掲書、pp.13-14。
- 9) 朝日、前掲書、pp.14-16。
- 10) 朝日、前掲書、P.16。
- 11) 朝日、前掲書、pp.18-22。
- 12) 金谷義弘「現代社会科学と方法の問題(1)」『教育文化学部紀要』第32号、2015年。
- 13) 論理学第一巻有論の第一篇「〔規定性〕質」の内部は、第一章が有・無・成からなる「有 (Sein)」でした。続く第二章「定有」は、A.「定有そのもの」、B.「有限性」C.「無限性」で構成され、第三章「向自有」へと続きます。本稿は、先行する原稿に続いて、この定有の無限性の中から最も優れたヘーゲルの論理学研究である「当為・限界・制限」の部分の科学的検証と再発見を目指しています。
- 14) ドゥノール、シュワルツ『欧州統合と新自由主義 社会的ヨーロッパの行方』論創社、2012年。このフランスの筆者たちは、統合の主導者たちが「社会的ヨーロッパ」を旗印にする戦後初期から一貫して、また、統合を担った社会民主党の勢力も新自由主義的政策に加担してきたことを説明している。
- 15) ここでは経済統合を想定し、問題を単純にするために非常に単純に金融・財政に限定している。
- 16) 久留間蛟造編『原典対訳 マルクス経済学レキシコン12 貨幣Ⅱ』大月書店、1980年、pp.2-5、訳もこれに従う。以下、この一連の書籍を『レキシコン』と言う。
- 17) 例えば、ISD条項 (Investor State Dispute Settlement, 投資家対国家間の紛争解決条項) のように、各国主権に対する投資家の直接的な介入を可能にする動きは存在するが、これは、本文のこのパラグラフに言う、(1)と(2)の二つの法則群の相互作用から生み出される、より複雑な運動であり、その複雑な運動過程は、おそらく現代資本主義の運動の諸前提を揺るがすような否定的結果を生む可能性があるものと言えます。
- 18) その典型例は、クルト・ツィーシャックの国家独占資本主義論です。彼は、個人企業家、株式会社、独占、国家独占といった私的諸資本と資本主義的生産様式の歴史的な発展を課題にしました。しかし、ここで事物の発展というものを、資本主義として越えることのできない限界と、その他の諸制限の突破という区別を立てずに、生産力の発展・生産の社会化とこれに照応した生産関係の社会化という図式を立て、生産力の発展にもとづく生産関係との矛盾に一時的解決が、新しい生産関係の形式を決定するという公理を打ち出したのです。資本主義が自らの限界を如何に突破できるのか、その突破の運動は、如何なる越えることのできない限界の中にあるのか、という点を見失うことから、資本主義は、ずるずると非資本主義的な変質をも起こすという見解に道を開く誤りが指摘されました。この論争の方法論的総括は、当時、十分されたとはいえません。K. Zieschang, *Zu einigen theoretischen Problemen des staatsmonopolistischen Kapitalismus in Westdeutschland, Jahrbuch des Instituts für Wirtschaftswissenschaften, Bd I, 1957*. 立脚する課題は異なるが、他の類例では以下。西山忠範『脱資本主義分析 — 新しい社会の開幕 —』(文眞堂、1983年)。ここでは「資本主義の実質的崩壊」、「脱資本主義社会の成立」という言葉が登場します。また、前述の朝日編著でも言及された発展段階論では、ベラ・バラッサの地域統合研究が、自由貿易協定から完全な経済統合にいたる5段階の発展段階論を提示しています。Béla Balassa, *The Theory of Economic Integration*, Richard D. Irwin, 1961. (バラッサ『経済統合の理論』ダイヤモンド社、1963年)。このように、この問題は古くから、形を変えて幾度も提起されてきたことが指摘できます。
- 19) ヘーゲルは、(1)その論理学の研究の第一部「有論」は、大きく三つの篇、すなわち「〔規定性〕質」・「量」・「限度」に分割され(図1)、最初の第一篇「〔規定性〕質」が三つの章に分割され「有」・「定

有」・「向自有」となっています。この大構成の意味はこうです。有論全体が、事物を、その内部関係など抜きにして、そこに見出されたままポコッと存在するものとして捉える認識の段階を表しています。内部関係にはいるのは、論理学第二篇「本質論」です。そこでは、眼前に見出される事象を「現象」とみて、その背後に「本質」があり、事象を二重に把握します。これにたいして、事物の存在を直接に受け止める有論では、事物を、まず質から見て、そして量から捉え、この分解された質と量という事物の2側面を統一して、量の変化が質に影響したりするという「限度」の考察に入って有論は完結し、本質論に受けつがれていきます。その第一篇「〔規定性〕質」の内部はこうです。有・無が不断に交替する生成・消滅の世界を捉えるのが第一章「有」で、ここでは「有（存在）」と「無（非存在）」を見て、その合成である万物流転の「成」にはいるわけです。しかし、事物はこの万物流転の中にあつて絶えざる流転の相だけがあるわけではありません。すなわち事物は、単に流転する世界の中に溶かしこまれてしまうだけでなく、一定期間特定の事物として自らを維持しており、この相対的な安定性があることもまた世界の実相です。この事物の相対的な安定性を捉え、そこに (da) 或る存在 (Sein) を指すものが第二章の「定有 (Dasein)」です。しかし、定有は、万物流転の世界のただなかにあつて自分を維持しているが、やがてはこの万物流転の相に飲み込まれ、自分を失い他者に移行してしまう矛盾したものです。しかし、世界には他者に赴いて「自分にとどまる」ものも存在します。例えば、ヘーゲルは、生命や認識などを想定しています。私たちは生命をそうみることに賛成できます。生命は、外界との物質代謝をしますが、その中で自分を解消せず、一生命体として存続します。こうした変化の中にあつて自分を維持する事象を研究対象にするのが、第三章「向自有 (Fürsichsein)」なのです。

ここに示された論理の展開は、人間が外界に存在する事象にたいして、その認識を一步一步すすめ、系統的にその認識を深化させる過程であるといえます。しかし、ヘーゲルでは、この認識過程は、同時に哲学体系の端初をなし、最も抽象的であり、かつ最も感性的で直接的でもある「有」から始まる論理のカテゴリー・概念の内的必然的な自己展開の過程であるかのように描くのです。しかし、私たちの思考から遊離して、論理のカテゴリーが自分から他の論理のカテゴリーを産出するとすれば、これほど奇怪なことはありません。この概念の自己展開は、ヘーゲルから学ぶわけにはいかない部分であり、この見解が、後述するようなヘーゲルの極めて合理的で、今なお多様な経験科学を研究する者が学ぶべき真理を、きわめて難解なものにしているのです。

さて、この第二章「定有」は、三つに区分されおり、最初が「定有そのもの」です。その次にくるのが「有限性」で、最後が「無限性」です。この「有限性」の考察の中に登場するのが「(c)有限性 β 制限と当為」に関する考察なのです。

- 20) ここにいう「規定 (Bestimmung)」と「規定性 (Bestimmtheit)」とは混同されてはならないのです。ドイツ語の規定の綴りの語尾-ungは、英語の-ingに相当し、規定とは規定する (bestimmen) 働きを表す能動的なものです。これにたいして規定性は、語尾に-heitをもち、規定する働きを受けて、その規定を刻印される受身的な言葉です。
- 21) 自己反省とは、自己批判をすることではなく、この文脈に即していうと、規定が性状を統一し、反対に性状によって規定が規定たる実を確証している関係にあること、この二者が互いに相手を前提し、

第一巻 有論	Erstes Buch Die Lehre vom Sein
第一篇 (規定性) 質	Erster Abschnitt : Bestimmtheit (Qualität)
第一章 有	Erstes Kapitel : Sein
A 有	A. Sein
B 無	B. Nichts
C 成	C. Werden
第二章 定有	Zweites Kapitel : Dasein
A 定有そのもの	A. Dasein als Solches
B 有限性	B. Endlichkeit
C 無限性	C. Unendlichkeit
推移	Der Übergang
第三章 向自有	Drittes Kapitel : Fürsichsein
A 向自有そのもの	A. Das Fürsichsein als solches
B 一者と多者	B. Eines und Vieles
C 反発と牽引	C. Repulsion und Attraktion
第二篇 量	Zweiter Abschnitt : Die Größe (Quantität)
(略)	
第三篇 限度	Dritter Abschnitt : Das Maß
(略)	

(注)【大論理学】の構成を終す。また、成、定有、向自有の個別構成は更に下位項目を有するが、ここでは省略する。

図1 ヘーゲル『大論理学』有論の構成
(質を中心に)

相互に支えあっているのです。そこで、二つのものが互いに相手を反射しあって、一つのものになっているのです。そこで「自己 (Selbst) 反省 (Reflexion)」なのです。

- 22) 『大論理学 上巻の一』岩波書店, 1956年, P.152 (*G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Bänden 5, Suhrkamp Verlag, 1969, S.142*)。括弧付きの番号は筆者が付した。
- 23) ヘーゲルの「概念の自己展開」に関する評価については, 前掲拙著参照。
- 24) この一句は本注釈22)の引用文の直前に位置する。
- 25) 『大論理学』上巻の一, pp.152-153 (*Werke 5, S.142-3*)。
- 26) 第二次世界大戦後, 弁証法に関する議論はソ連・東ドイツなどの研究者のものが多数, 翻訳され輸入されました。しかし, それはマルクスやエンゲルスの書き残した概略的な記述を複製したものが多く, ヘーゲル論理学の中にある言及されることのない価値ある考察を, 分析的方法を踏まえる科学的立場と20世紀の科学の到達点から再発見し記述したものではありませんでした。これに着手したのは, その包括的性格においても, 現代科学との交流においても, 洋の東西において見田石介以外にありません。しかし, わが国では, 宇野弘蔵氏の三段階論の批判などに隠れて, 見田の業績を具現する『大論理学研究①~③』(大月書店, 1979~1980年)の意義は十分理解されていないように思います。この第一巻の鈴木茂氏ら編集委員会の序文参照。また, ヘーゲルは定義を批判します。その批判は, 如何に定義が事物の運動を捉えないかという点で極めて合理的なものです。しかし, 叙述に展開によって, 当初の定義の意味が豊富化されるような, 分析と総合, その上に弁証法的方法が組み合わされることで, 事物の生動性は捉えることができるのです。
- 27) 見田石介『ヘーゲル大論理学研究①』, 大月書店, P.172。
- 28) 見田, 前掲書, P.171。
- 29) マルクス『経済学批判要綱 II』, 大月書店, 1959年, P.255。
- 30) マルクス, 前掲邦訳書, P.343。
- 31) マルクス, 前掲邦訳書, P.350。
- 32) この索引は, それ自体が独自の科学的成果であると言えるほどの内容を持っています。久留間鮫造編『原典対訳 マルクス経済学レキシコン 10 索引』(大月書店, 1978年)の恐慌の巻に対応した索引の項目「II. 資本主義的生産に特有の諸制限」(pp.328-332)がそれに当たります。後年刊行された普及版の『⑧総索引』(大月書店, 1995年)ではpp.150-153に相当します。
- 33) マルクス『資本論 第三巻』大月書店, 1968年, pp.562-563。括弧付き番号は筆者が加筆しています。
- 34) マルクス『経済学批判要綱 II』, P.338。
- 35) 本多久夫『形の生物学』日本放送出版協会, 2010年。同『シートからの身体づくり—生物が採用した自己構築法』中公新書, 1991年。
- 36) 本多, 前掲書, P.17。pp.69-82。
- 37) 本多, 前掲書, P.22。傍点, 筆者。
- 38) 本多, 前掲書, pp.7-9。
- 39) 多細胞動物の発生過程における上皮シートの融合やつなぎ変えというレベルのみならず, 本多氏は, 細胞レベルでも細胞膜などの生体膜においても, 同様の融合・つなぎ変えがあることを, 上皮シートにおける事象と対比して, その論点に広さと展望を与えている。本多, 前掲書, P.36。
- 40) 『剰余価値学説史』大月書店, 第26巻第二分冊, P.722。